

大学教員における仕事と私事の満足度



高井まどか

東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻
[113-8656] 東京都文京区本郷7-3-1
教授, 博士(工学).
専門はバイオマテリアル, バイオデバイス.
takai@bis.t.u-tokyo.ac.jp

前置き

理工系の大学生であれば、就職活動が始まるころに、社会人として仕事に就くことの意義に真剣に向き合うこととなります。さらに、働き始めると、職場でのキャリアパスが見えてきて、人生設計が描けてきます。私は大学を学部で卒業後、企業に就職しましたが、辞めて大学に戻り博士号を取得しました。その後、国立の研究所でのポストクを経て、大学の教員職につきました。本稿では、企業、国研、大学という異なる組織で働いた経験をもとに、私が思う職業選択の基準を紹介します。

楽しむことができる仕事をみつける

仕事は、趣味とは違うので、楽しいことばかりではなく、苦勞も多いのが現実です。辛くとも、仕事だからと割り切って、人生そのものを楽しむことができる人もいるでしょう。しかし、好きなことができ、やりがいのある仕事があって、充実した幸せな人生を送れるというのもまた事実かと思えます。満足のいく人生設計の基準は人それぞれです。私の場合は、「楽しいと思えることを仕事にする」でした。

私が人生と向き合ったのは、企業に入社して半年経ったころでした。両親、とくに父の意向を受けて生涯働き続けることを想定していなかった私は、強い信念もなく大手の電気メーカーでの研究職を選択しました。仕事内容は研究開発なので、大学時代の研究室生活と同様に楽しくできるものだと信じていました。しかし仕事となると、責任が大きくなります。また、企業ですので、当然、営利目的で運営されているため、研究開発目的も教育機関とは異なります。会社に入ってみて、大学時代の延長では仕事は成り立たないと初めて気づきました。同時に、私の人生設計の基準との矛盾を感じました。—長い人生、仕事を続けるかぎり、“楽しさ”と“やりがい”に包まれながら、私生活を含めて満足を得たい—、つまり私は、改めて自分の基準に向き合い、問いかけ、そして「楽しく興味のもてる仕事」を選択する結論を出しました。そうすれば、多少嫌な業務があっても、総合的に満足度が得られるだろうと考えたためです。さらに仕事をして実感したのは、

興味ややりがいだけでなく、職種に適正があることでした。学生時代は自分を高めるための学習で、競争相手は自分でしたが、社会では組織としてその成果が求められるので、異なる能力がそれぞれの個人に求められます。つまり、他人とは異なる「自分の特徴(私でなければできないこと)」を活かせる職種に就くことが、幸せ度を高くできるということに気づいたのです。そこで、「興味と楽しみ」に、自分の「性格と特徴」を掛け合わせて職業を考え直すことにしました。そして、自然現象を追い求める科学が、私の興味と楽しみであり、人に教えることの好きな性格を活かせる教育が、私の特徴であると自己評価しました。悩んだ時間もありましたが、自分のもつ能力を最大限発揮できる職業は「大学での教員(研究者)」に違いない、と心をきめて選択しました。

最後に、諦めないことで道を拓く

企業を辞め、大学に戻り博士号を取得した後の就職先が順風満帆であったわけではありません。東京大学大学院工学系研究科の教員に採用された2000年ごろの日本では、組織は男性中心でまわっていました。女性がいたとしても、女性を育てるという社会の仕組みがまだまだ充実していなかった時代です。大学で周りを見渡しても、女性の教授はほとんどいませんでした。さらに、大学教員の働き方は昼夜問わずでした。体力がある若い時代はついていけたのだろうけど……将来に不安を感じてしまった私の背中を押してくださったのは、当時、日本女子大学で教授をされていた女性の先生でした。「他人と同じことをする必要はなく、自分のやり方で仕事に向き合いつつ成果を出していければ良い」とのアドバイスには救われました。先生は、お忙しい中、いつも親身になって相談ののってくださいました。話を聞いてもらえるだけで、気持ちが楽になり、また、がんばろうという前向きな意識になることができました。それからは、とにかく諦めずに目標を成就することを目指すことができました。今では、女性管理職の方も多く、私が後輩たちにアドバイスする年齢です。諦めずに追い求めることが道を拓くというメッセージを送ります。